

熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ
Quarterly magazine FOYER
2022 spring

つながる、ひろがる、あつまる
ほわいえ

012

FOYER



Special feature
熊本県立劇場開館40周年 日常に、劇場を。
40周年の県立劇場へ Messages

熊本復興祈念
水と火と木、
そして再生の物語

Life with a Theater.



熊本県立劇場
KUMAMOTO PREFECTURAL THEATER

【企画・発行】
公益財団法人 熊本県立劇場
熊本市中央区大江2-7-1 〒862-0971
www.kengeki.or.jp

【編集・制作・印刷】
株式会社 ジャム
熊本市中央区練兵町45早野ビル1階 〒860-0017
www.jam-cf.com

熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ 2022 spring 発行日:2022.3.31 ※掲載内容は3.31現在のものです。

Special feature 熊本県立劇場開館40周年

日常に、劇場を。

熊本県立劇場が歩んできた40年の先に、文化・芸術の未来がある

1982(昭和57)年、音楽、演劇の専用ホールを有した劇場としての歴史の一步を踏み出した熊本県立劇場は、2022(令和4)年に開館40周年を迎えます。

当時、公共施設としては珍しい、専用ホールを有した施設の計画として建設準備室が設置されたのは1978(昭和53)年のこと。公共のホールの多くが、多目的ホール建設が全盛期でもあった時代。準備段階から「県民文化ホール」の呼称が進められていましたが、熊本にはすでに市立の素晴らしい多目的ホールがあり、当時の計画担当者たちのアイデアで「音楽と演劇それぞれの専用ホールをつくる」という先駆的な構想がありました。設計には、モダニズム建



Life with a Theater.

築の旗手として日本建築界を牽引した前川國男氏があたり、「私のライフワークとしたい」とまで言及するほど心血を注いだ建築物が完成。名前も計画にあった「県民文化ホール」から「熊本県立劇場」となり、文化・芸術の殿堂として開館しました。

それぞれのホールでは、これまで数えきれないほどの感動のシーンや、人生を変えてしまうほどの心動かされるドラマが生まれてきました。それが私たちにとって次へ、次へと進んでいく原動力でもありました。時代によって、文化・芸術が、劇場が求められることは変化してきました。誰かの人生がぶつかって、化学反応を起こしていくエネルギーはいつの時代

も変わらないものだと思っています。2016(平成28)年の熊本地震、2020(令和2)年の豪雨災害、そして全世界で猛威を振るう新型コロナウイルス感染症。その後に、劇場がどんな役割を果たしていくのか。その問いに対して、県立40周年のスローガンとして掲げたのは「日常に、劇場を。」という言葉です。そしてそのスローガンのもとに、劇場職員、スタッフの気持ちの旗印となる40周年のロゴを制作しました。スローガン、ロゴの制作から決定に至るまで、これまでの劇場の歴史、これからの劇場のあり方について多くの話し合いの時間を重ねました。日常のどこかに劇場の存在を感じていただけるような、そんな取り組みに力を入れてまいります。



夢をもってステージに立つ人、そして県立劇場の職員やスタッフ、その両者が寄り添い、ともに歩む未来をイメージした40周年記念のロゴです。漢数字の「四」は、ステージの舞台幕を表現し、それは夢のサポート役である職員の姿を。そして、太陽を表現した「ゼロ」は、夢に向かってステージにあがるアーティストを表しています。



40周年の 県立劇場へ -Messages-

県立劇場40年の歴史の中で、コンサートホール、演劇ホール、それぞれのホールの舞台上には数えきれない感動の場面が生まれました。その場面をつくりだしてきたアーティストの方々から40周年を迎えた県劇へ、あたたかいメッセージをいただきましたのでご紹介します。



山田 和樹
[やまだ かずき]
指揮者

「あ、県劇だ！」
写真や映像に少しでも県劇が映っていたら、すぐに熊本県立劇場だと分かるのは皆さんも同じでしょう。僕のようにたくさんさんのホールで仕事をする身でも、オリジナリティ溢れる熊本県立劇場は瞬間的に判別することができます。正面玄関、ロタリー、楽屋口、ホール、練習室、廊下、レストラン、どこを切り取ってもそこには強いオリジナリティがあるのです。

そして、「あ、県劇だ！」と思うとき、(熊本の)というカッコ書きが入らない不思議があります。僕の中では「県劇」熊本県立劇場になっただけです。ここ数年ご無沙汰してしまっていますが、ときどき無性に県劇の舞台に戻りたくなることがあります。

県劇のオリジナリティが人を惹きつける魅力を生み、人が集うことでエネルギーが生まれ、日常と非日常とが同居する空間が育まれていき、数々の公演は「思い出」という名のプレゼントとなつて、私たちに届けられています。

文化は一日にして成らず。県劇が熊本の文化の一大発信地であることはもちろんですが、今後ぜひ世界を見据えたプランが練られることを期待しています。くまモンのように、熊本から世界へ！40周年、おめでとございます。祝!!!

山田和樹



©T.Aoki

平田オリザ
[ひらた おりざ]
劇作家・演出家

公演やワークショップ以外にも、劇作家大会やステージラボ(日本中の公共ホールのスタッフ向けの研修講座)など熊本県立劇場さんについては様々な記憶がよみがえってきます。しかし、なんと言っても一番の思い出は『隣にいても一人』の滞在制作でした。オーディションから長期にわたる稽古まで、熊本に長く滞在することで多くの演劇人と知り合い、今もその交流は続いています。

平田オリザ



©Takashi Iijima

佐渡 裕
[さど ゆたか]
指揮者

このたびは熊本県立劇場40周年を迎えられ、心よりお祝い申し上げます。県立劇場の大舞台は素晴らしい音響を持ち、この指揮台に立つことは常に大きな喜びを私に与えてくれます。熊本とはこの10年ほどの間に特に色々なご縁が生まれました。テレビ番組「鶴瓶の家族に乾杯！」で笑福亭鶴瓶さんと共に震災前に熊本を訪れていたため、2016年に熊本で地震が起こった際、阪神淡路大震災を経験していた私は居ても立っても居られない思いがありました。被災した方々を励ますことが出来たらと、兵庫で活動している(スーパークィーズ・オーケストラ)と益城町や南阿蘇の被災地や県庁ロビーで演奏をしたり、私が音楽監督を務めるオーケストラの(トーンキョンストラ)管弦楽団の日本ツアーでは、彼らと一緒に公演後のロビーで募金箱を持って支援金を集めたりしました。募金活動で集まった1000万円近いお金は被害のあった熊本県内の学校の楽器修理のために大変有意義に使われました。

これらのすべての活動を県立劇場の優秀なスタッフの皆さんがコーディネートしてくださり、一緒になって熊本

県内の色々な場所に出かけて、支援活動を支えてもらいました。ホールの外にも音楽を届けて行きたいという彼らの強い意志と情熱、柔軟で謙虚な姿勢にいつも助けられました。募金の分配や使用について、公平で大変細かな配慮を持って最後まで作業してくださった県立劇場のスタッフの伊津野さんがその後、若くしてご病気で亡くなられたことは、私にとっても大変悲しいことでした。

楽しい思い出もたくさんあります。2018年の5月、トーンキョンストラの来日公演を県立劇場で行った日がちょうど私の誕生日でした。劇場と楽団が素晴らしいサプライズを用意してくださり、アンコールの時に、指揮台に熊本の銘酒「瑞鷹」の酒樽が運び込まれ、お祝いの法被を着せてもらって姜尚中館長と一緒に鏡割りをしたのです！満席のお客様様に盛大に祝っていただき、とてもうれしく忘れられない光景です。

これからも熊本県立劇場が作ってくれた、沢山の思い出や縁を大切に、またあの素晴らしい音響に包まれて指揮台に再び立つ日を心待ちにしています！

佐渡 裕

熊本県立劇場開館40周年おめでとうございます。

私が初めて下見とワークショップで劇場を訪れた際は、まだなお震災の傷跡が残っていました。壁の亀裂、敷き詰められたシート。闇と埃を被った昇降バトン。煌びやかな劇場とはかけ離れた様相を案内してくださったスタッフの方の復興を誓う姿は忘れません。そして私の演出した、2018年『不思議の国のアリス』と2019年のオペラ『ドン・ジョヴァンニ』の全国ツアーの大千穂楽が、いずれもこの復興中の熊本県立劇場だったこともあり、とりわけ愛着を抱いています。苦楽の旅の末にたどり着いた熊本は、共に旅したスタッフ、共演者と涙を流し、再会を誓った場所でもありました。また熊本県立劇場で踊る日を心から楽しみにしています。

森山 開次



森山 開次
[もりやま かいじ]
舞踏家/振付家/演出家

©Sadato Ishizuka

熊本県立劇場開館40周年おめでとうございます。

文化は人々の歴史・ご縁、出会いによって様々な進化・深化を遂げて参りました。熊本には素晴らしい文化・芸術が詰まっております。

先人たちの意識の高さ、そして、現在の皆さまがその意識という財産を伝えてこられたからこそその文化の高さが、熊本を支えていると感じております。

この素晴らしい熊本県の芸術文化祭に携わって数年が経ち、「邦楽」「民謡」という財産を次に繋げるお手伝いを微力ながらさせて頂きました。今年も熊本が誇る伝承芸能を皆さまにご紹介します！

これからは熊本県立劇場が芸術文化の発信の源として、次の世代にこの文化・芸術が更なる発展をもつて続いていかれますことを願っております。

藤原道山
【ふじわらどうざん】
尺八演奏家



藤原道山



©Kazuyoshi Shimomura

小曾根 真
【おぞね まこと】
ジャズピアニスト

熊本県立劇場さま、そして大切な熊本の方々に、

コロナ禍は勿論のこと、この数年は大きな災害に見舞われた熊本県。激変してしまった日常生活が多くの皆さまにとつてどれだけストレスになっているのだろうかと考えると本当に心が痛みます。音楽家は「音楽」という「言葉」を通して皆さんの心に元氣をお届けする事ができますが、震災直後に熊本県立劇場で演奏させて頂いた時、逆に客席の皆さんからステージ上の僕らの所に届いたエネルギーに感動したことを今でもはっきりと覚えております。

肉体が生きるために食べ物が必要なのと同様に、心が生き続けるために芸術があります。音楽は傷ついた心を癒してくれるだけでなく、自分で気がつかないところにある心の傷を見つけ、治してくれます。音楽が繋げてくれる心と心。

そしてそんなミラクルを起こしてくれる場所が劇場です。会場に入るまでは会ったこともない人と隣り合わせで座り、たった2時間強、音楽を聞いて泣いたり笑ったり、体が揺れたり。

そんな奇跡の起こるこの熊本県立劇場も今年で40周年を迎えられると伺いました。この40年の間にここで泣いたり笑ったりされて大切な方々の魂の響とそのエネルギーがこのホールには宿っています。そして時が過ぎると共に、新しいミュージシャン達がこのステージに立ち、客席にいらっしやる皆さんと再び幸せに満ちたミラクルな物語を創って行くのです。これからもこの素敵な空間を皆さんのために守り続けてください。
I am so looking forward to coming back!!

小曾根 真

館長あいさつ

劇場が日常に地続きでつながり、一人ひとりのドラマにつながる

1982(昭和57)年の開館から40年。コンサートホール、演劇ホール、それぞれのホールの中では多くの感動が、ドラマが生まれてきました。この40年の歴史を振り返ることは、記録とともに、次代につなげていくステップでもあります。2016(平成28)年の熊本地震から、2020(令和2)年の人吉・球磨地域の豪雨災害、そして全世界で猛威を振るう新型コロナウイルス感染症など、さまざまな厳しい状況の中、劇場の存在価値、存在意義は何なのか。決してノスタルジーに浸るだけでなく、その先にどうつなげていくのかを、問うことでもあります。

私たちが40周年で掲げた「日常に、劇場を。」という言葉には、文化・芸術を提供する劇場が、みなさんの日常に地続きにつながってほしい、という願いを込めています。文化・芸術によって、世の中をすぐに変える

ことはできないかもしれませんが、人は舞台上のパフォーマンスに心をふるわせ、時に涙を流すこともあります。文化・芸術は定量化ができないものの、人の心に訴え、内側からじわじわと変化させ、それが外側の世界を変えていく可能性を秘めています。余剰としてではなく、私たちの日常の中に組み込まれることで、さらに価値を生みだします。そのため

に、これからの劇場は、文化・芸術にふれられる機会を増やす工夫と努力を重ねていかねばなりません。時には、この場から飛び出して、「動く劇場」として熊本県内の地域に赴いていくことも増えてくるでしょう。劇場が県民の共有財産であることを胸に、県民の広場として、次の50年、60年に向けて、県民とともに歩み、進化し続けていきたいと思えます。

熊本県立劇場 館長
姜 尚中
【かん さんじゅん】



利用団体紹介
PLAYERS
SQUARE

全国に25カ所の拠点がある児童劇団「大きな夢」。その熊本のミュージカル劇団として誕生した「熊本子どもミュージカル」は、2022（令和4）年に10周年を迎えます。発足のきっかけとなったのは、発起人の小幡まさ子さんのお兄さんが舞台音響として児童劇団「大きな夢」の舞台をサポートしたこと。そこから、「舞台の経験を積むごとに子どもたちが成長する姿に感銘を受けた兄が、熊本でもミュージカル劇団を立ち上げたいと強く思うようになり」と、熊本子どもミュージカルを振り返ります。10年前の発足当時は、熊本ではミュージカルは馴染みが薄いといわれていましたが、無料体験レッスン、説明会、ミュージカルワークショップを重ね、第一期生となる小学生から高校生までの子どもたちが集まりました。ほとんどの子が、人前

で歌ったり踊ったりしたことがなかったものの、児童劇団「大きな夢」に所属する第一線で活躍する指導者のもと、初演を無事に終えました。「二期生の中には、その後映画に出演した子もいますし、ミュージカル『ピリ！ エリオット』の日本初演で、1500人以上のオーディション応募者の中から主役に抜擢された子もいます」。児童劇団「大きな夢」は全国にネットワーク展開しており、それぞれの地域で公演を支えているのは、子どもたちの父母が運営する「父母会」です。全国約700名の劇団員の間では交流も盛んで、熊本地震直後の公演では、全国の父母会のサポートに助けられたことも。「子どもたちにとって歌って踊ることが自信につながっています。また、全国に仲間がいることで経験が広がり、いきいきとした成長につながっていると実感できます。ぜひ熊本のたくさんの人に知ってほしいと思っています」。週に一度の練習会の見学や、年に一度の定期公演のワークショップなど、その魅力にふれる機会は多くあります。



4月17日(日)に開催される熊本子どもミュージカル10周年記念公演「魔女バンバ」は、動画配信でも公開します。

◎動画配信情報

10周年記念公演「魔女バンバ」

【配信期間】

2022年4月29日(金・祝)～5月2日(月)



▲動画配信
お申し込みはコチラ



▲劇団公式HP

児童劇団「大きな夢」
熊本子どもミュージカル

歌って、踊れることが、
自信につながる
ミュージカルの魅力を
熊本に広めたい



小幡 まさ子 [おばた まさこ]
熊本子どもミュージカル

県劇自主事業案内
KENGEKI
KANGEKI

Highlight

熊本復興祈念
水と火と木、
そして再生の物語

3月12日 演劇ホール



熊本に甚大な被害をもたらした熊本地震から5年。災害からの復興をテーマに、古代から現代、そして未来の「時」の流れと変容する風景を、映像、音楽、演劇、ダンスパフォーマンス、詩の朗読で表現する復興祈念作品「水と火と木、そして再生の物語」を上演。総合演出として熊本出身の映画監督、行定勲さん、振付、演出には日本を代表するコンテンポラリーダンスカンパニー「二プロール」主宰の矢内原美邦さんを迎え、この日限りの上演作品として創作しました。熊本出身の俳優橋本愛さんと高良健吾さんが、ネイティブの熊本弁で繰り広げる二人芝居、オーディションで選ばれた熊本を中心にした九州在住のダンス、阿蘇市の中江若戸音楽保存会による音楽で、熊本の水、火、木と時間を、それぞれに抱いている震災への思いを胸に表現しました。劇中で高良健吾さんが朗読する詩は、

自身も熊本地震を経験した行定監督が書いたもの。それは、再生に向けて熊本で生きる人々に向けて、背中を押すようなメッセージでもありました。上演後には、行定監督と県立劇場館長の姜尚中のトークセッションが行われ、「舞台上の演出で撮影した映像は、100年後にも熊本に残っているものを選んだ」と行定監督の言葉が印象に残りました。今回ご紹介した上映作品、トークセッションの様子は、後日配信予定です。



この作品を象徴する舞台上の演出道具、ベンチ。作品制作に携わった人たちにメッセージを書いてもらいました。このベンチは、県劇の中央モールに設置しています。



熊本県立図書館タイアップ企画
本の中にある劇場

熊本県立図書館と県立劇場のタイアップ企画として、2007(平成19)年度から県立劇場の文化事業に関連する図書を「〇〇を楽しむブックリスト」としてご紹介しています。作曲家や演奏家のこと、楽器にまつわる話や演劇の原作本。さらにはスポーツ、科学に関する本もそして、このコーナーでは、県立図書館職員おすすめの一冊をご紹介します。ここでご紹介したおすすめ本もブックリストの本も熊本県立図書館で読むことができますので、ぜひ足を運んでみてはいかがでしょうか。



著／松尾正一
出版／熊本日日新聞社

熊本県立図書館 情報支援課 指導主事
小畑 祐介(おぼた ゆうすけ)

『肥後にわか 笑いの来た道』

「昔前、私は学園祭でコントを作って披露していました。そこで感じた恐ろしさや興奮は何物にも代え難いものです。熊本での舞台の笑いといえば、肥後にわかを外せません。「肥後にわか」とは元は祭りの余興などで披露されていた喜劇。知らない方も、肥後にわかが生んだ大スター、ばってん荒川さんのことはご存知ではないでしょうか？一見素人芸のように見えますが、実際は得意即妙の紛れもないプロの技。今でも笑顔で思い出されます。この本は、そういった肥後にわかへの過去から現在を、丁寧な取材をもとに人物、出来事からまとめています。印象的だったのは、その思い出を語る七十代ご婦人の言葉。
「筋はいつちよん覚えとらんバツテン、おもしろかことば言いよったことはよく覚えとる。」
これこそが肥後にわかのパワーと言えるでしょう！なんだか閉塞感を感じる現在、舞台からあふれ出る「笑い」に対する情熱と歴史をこの本で感じたいものです。

SPECIAL NEWS!
震災特別感謝状

2011年3月11日、東北3県を中心に東日本の広い地域で大地震が発生しました。被災地の復旧は徐々に進みましたが、震災を契機に家族を亡くした人、長年住み慣れた土地を離れなければならなくなった人などのこころの復興が大きな課題でした。こうした方たちに少しでも元氣になっていただこうと、熊本県立劇場では2013(平成25)年から2017(平成29)年まで5回にわたり、被災した東松島市に芸術家を派遣しました。

このたび震災10年を機に東松島市長から震災特別感謝状が届けられました。



県劇スタッフリレーコラム

参与

本田 恵介(ほんだけいすけ)

40年を振り返って

この春号が発行される頃、開館以来40年近く勤めた県立劇場を「卒業」する私に、編集スタッフからこれまでを振り返ってなにか書いて欲しいという宿題が出された。そこで現在の県立劇場スタッフの大半が経験することのなかった初期の事業を思い出しながらそれに応えたい。

私にとって最大のエポックメイキングな出来事は、昭和63年から約10年間館長を務めた鈴木健二氏との出会いだっただけかもしれない。

鈴木氏は当時NHKの人気アナウンサーだったが、退職後は細川護熙元県知事の要請に応え熊本県で文化を通じた地域おこしに尽力された。鈴木氏が手掛けた事業の中でも印象深いのは、阿蘇市波野に伝わる『中江岩戸神楽三十三座完全復元公演』と『こころコンサート』である。

鈴木氏は館長に就任すると、当時県内にあった98市町村を巡り、地域の首長さんだけでなく文化活動に

携わるキーパーソンからも直接話を聞かれた。

そこで過疎化により衰退しつつあった地域の芸能を残すことが急務だと考え、さまざまな芸能の復活や活性化に力を注がれた。阿蘇地域の神楽や山都町の清和文楽など、人口減少のなかにあっても今では元氣を取り戻しつつあるこれらの芸能に鈴木氏が果たした役割は計り知れない。こうした地域の民俗芸能がそこに暮らす人々のよりどころとして心の支えとなっている例は全国でもみられるが、その先駆けとなった事業と言えよう。

当時の私は、民俗芸能に関する事柄を取り扱うのは教育委員会の役割と考えており、劇場が直接関わる分野とは思っていませんでした。しかし、中江岩戸神楽の徹夜公演を体験するなかで、劇場の新たな役割を認識することとなったし、今では全国各地の民俗芸能が地域の劇場で披露されている。

『こころコンサート』は、障がい者施設に健常者の音楽グループが一年間通って音楽を一緒につくりあげ、



最後に県立劇場で披露するというものだ。私も含め職員は障がい者施設をいくつも担当し、月一回の練習に立ち会った。そこでは、地域の中心部から離れた場所に建てられた施設のなかの様子を初めて目にしたし、鈴木氏にならって障がいのある方たちと積極的に触れあい心のバリアを少しずつ取り除いていった。鈴木氏のこうした取り組みが全国に波及し、行政や健常者から障がい者に注がれるまなざしが変わってきたきっかけをつくったと思う。その後の国の政策や県民・市民の意識の変化にも影響を及ぼしたと考えるが、これからの県立劇場を担う後輩たちにも、文化芸術をとおして社会が抱えるさまざまな課題を解決してくれることを期待している。